# ダーウィン後の人間の堕落

渡辺 久義、日本
京都大学名誉教授

## *ダーウィニズムが学術界を腐敗させる*

ダーウィニズムによって腐敗させられた科学者という最近の現象は、部外者から見てもあきれるばかりである。ディスカヴァリー研究所・科学と文化センター（ＣＳＣ）による Evolution News & Views というブログに掲載された最近のニュースに次のようなものがあった――

証拠に従うこと vs. でっち上げ科学：
Stephen Meyer と Chris Mooney が月曜日 Medved ショーに

> 11 月 16 日（月）スティーヴン・マイヤーとクリス・ムーニーがマイケル・メドヴェド・ショーに登場する。…ムーニーは頑固なダーウィン弁護者で、ここＣＳＣのさまざまな研究員が過去にも彼と論争しており、我々がここで何度か取り上げた人物である。彼の科学観はエリート主義的で傲慢で、反対意見をメディアから追放し、世論を操作せよというような主張をしてきた。彼は自分と意見の異なる者は誰でも科学を知らない者だと決めつける。彼が、ケンブリッジの博士号をもちムーニーとは全くあらゆる点で意見の違うマイヤーと、どう渡り合うか興味深い[1]。

不幸なことに、この「傲慢な」クリス・ムーニーが今日の学術界――生物学領域だけでなくその全体――を代表しかつ牛耳っている。ダーウィニズムの問題は、理論そのものより、むしろその考え方の根底に潜む傲慢ということにある。ダーウィニストに対して我々は、「あなたは自然界からその現実のあり方を聞き出そうとしているのか、それとも、自然界に対してどうあるべきかを教えようとしているのか？」と訊ねたくなる。彼らの学問的探究の方針は、「証拠に従う」ことでなく「科学をでっち上げる」こと、すなわち自然自身が従わねばならない理論を確立することである。

この転倒した傲慢はダーウィン的世界観の生み出したものであり、それは破壊的なものである。ダーウィニズムとは、全宇宙で最も高度に発達したものである人間の頭脳を超えるものは存在せず、従って理論を作り出す人間の頭がすべてにまさることを要求する哲学である。科学や学問一般は、真理を探究する仕事であるとこれまで理解されてきた。しかしダーウィン後の世界では、人間を超えるものが何もなく、人間の心を超える「心」という

ものがないのだから、探究すべき「真理」というものがないのである。この哲学は人文科学を含めた学問的探究のすべての領域に浸透している。例えば我々は、シェークスピアのフロイト的解釈とか、あるロマン派詩人のマルクス主義的読み方というようなことを耳にする。それらはそれらなりに面白いが、詩人たちは解釈者のルールに従属させられているのであって、詩人自身に対する我々の興味から押しやられている。このような研究が面白いのは、ドーキンズの『利己的な遺伝子』がそれなりに面白いという意味で面白いにすぎない。科学が科学者の頭のよさの見せびらかしであってならないのは当然である。しかしダーウィニズムはそれを一つの合法的な科学的探究として正当化した――例えば、デリダ流の「遊戯的」文芸批評のように。

このダーウィン的傲慢はまた、科学そのものの正しい発達を妨げ遅らせるという罪深さをもっている。次にあげるのは、同じ上記のブログにＩＤ（インテリジェント・デザイン）唱道者 Casey Luskin によって報告されている最近の分子生物学分野の顕著な例である[2]――

ラスキンはこう書いている――「もともとネオ・ダーウィニズムの唱道者たちは、〈ジャンクＤＮＡ〉というものを、生命は盲目的でランダムな突然変異という出来事の結果であることを示す機能をもたない遺伝子のゴミだと言いふらしていた。」すなわち、独善的なダーウィン体制派は、自然界の何であれ自らの独断的ルールに矛盾するものを否定してきた。ところが「進歩は、ひとたび経験的データ――進化論的思い込みでなく――が科学研究の方針として許されたときに可能になるもののようである。ダーウィニズムに基づく〈ジャンク〉という考え方が研究の障害となり、機能をもたない進化のゴミと考えられていた生物学的特性に実は機能があったという発見を遅らせたという事実は、今は秘密でも何でもない。」

彼は続けて言う――「2000 年のサイエンス誌に載ったある論文は、〈ジャンク〉という考え方が、このような重要な遺伝学的構造の機能の研究から〈主流の研究者たちを遠ざけた〉と説明している――

> キャッチフレーズとしては面白いが、この「ジャンクＤＮＡ」という言葉は長年にわたってコードしないＤＮＡの研究から主流の研究者たちを遠ざけてきた。ごく少数の浮浪者を除いて、いったい誰が好んでゲノムのゴミをあさろうとするだろうか？　しかし一般世間と同じように科学の世界でも、嘲笑される危険を冒しても不人気な領域を探検しようとする浮浪者たちがいる。彼らのおかげで、ジャンクＤＮＡの考え方、特にその反復する部分の考え方が 1990 年代初期に変わり始めたのである。現在、ますます多くの生物学者たちが、反復部分をゲノムの宝とみなすようになっている。」

(Wojciech Makalowski, “Not Junk After All,” *Science*, Vol. 300(5623):1246-1247 (May 23, 2003).)

更にラスキンを引用すれば――「これも 2003 年に、研究者 John Mattick がサイエンティフィック・アメリカン誌に、ある種の〈ジャンク〉ＤＮＡを機能をもたないものとして認めなかったことは、〈正統派が事実の客観的分析という道を踏み外した古典的な物語であり、分子生物学の歴史の最大の過ちの一つとして歴史に残るであろう〉と言っている。」

人は、科学で重要なのは頭のよさであって、傲慢とか謙虚といったことは全く関係がないと考えるかもしれない。しかしそれほど事実から遠いものはない。ダーウィン的傲慢の罪深さが誰の目にも明らかに見えてきたのは、特にＩＤ運動が 10 年かそこら前に盛んになってきて以来のことである。2007 年アイオワ州立大学で起こった天文学者ギエルモ・ゴンザレスの事実上の追放事件は、その典型的なものである。ゴンザレスは共著である『特権的惑星』という本でＩＤに与する態度を取った。それは観察的データに基づくごく遠慮がちな提案で、この宇宙は人間を頭において目的と意図をもって作られたものではないかという内容のものであったが、アイオワ州立大の教授会と当局は、明らかに誰よりも適格者である優秀な彼のテニュア（終身在職権）を認めないことによって、彼を罰し追放することに合意した。

これは驚くべきことである。大学というところは現実の政治的闘争がなされる場所ではない。それは人間の知的水準が健全な論争を通じて向上することが期待されている場所である。誰もこのようなことがこの大学で、そして潜在的にはどの大学でも、起こるだろうとは予想していなかった。これは大学人が研究者としても道徳的人格としても、科学的にも倫理的にも、ダーウィン以後腐敗堕落していることの顕著なしるしである。そしてこれはここだけの話ではない。このようなショッキングな発見は、デザインされた宇宙という考えを打ち出したＩＤの出現以前には、誰も予期しなかったことである。これはダーウィニズムの権威によって科学者の間に醸成された傲慢が、彼らを真理から遠ざけるのみならず、道徳的人格をも腐敗させていることをはっきり示している。

もう一つ同じようなケースは「スミソニアン研究所」でのもので、この研究所の学術雑誌の編集に当たっていたリチャード・スターンバーグ研究員が、査読を経た（スティーヴン・マイヤーによる）ＩＤ支持の論文をそこに掲載したために、同僚から迫害され職を失った事件である。こうした不正に義憤を覚えたベン・スタインの作った、今は有名になったドキュメンタリー映画『追放――インテリジェンスは許されない』の中で、最初に登場するスターンバーグが「私は知的テロリストとみなされました」と言っている。なるほどテロにはテロをもって応ずるというのがダーウィニストの論理のようだ。科学の聖域に神を踏

み込ませないためには、無神論の優越性を有神論から護るためには、どんな卑劣も不正も許されているのである。

*進化論的倫理は倫理を滅ぼす*

ダーウィン思想のもたらした最も恐るべき結果は、倫理について形成された考え方である。『ダーウィンからヒトラーへ――ドイツにおける進化論的倫理、人種差別、および優生学』（2004）の著者リチャード・ワイカートはこの点を強調している。ワイカートによれば「進化論的倫理」とは、倫理そのものが進化の産物で、しかもこの進化は世界をよくするという含みをもった考え方である。ヒトラーの哲学の根底にあるのは間違いなくダーウィニズムで、それはドイツの帝国主義イデオローグ、エルンスト・ヘッケルの手によって強化されたダーウィンの進化論的倫理である。

ダーウィンはヘッケルにとって、人種差別と優生学を正当化し、それらに合理的な科学的根拠を与えた偉大な人物であった。ダーウィンによって進化論は、誰もその真理であることを疑うことを許されない科学になった。我々の生物教科書はいわばヘッケルによる欽定教科書で、現在でもヘッケルによる脊椎動物のニセの胚の絵とともに、今は間違いが証明されている彼の描いた系統樹を載せている。ダーウィン=ヘッケル主義（これはマルクス=レーニン主義にならった私の造語だが）というものが、気付かれることはなくとも、我々の唯物論文化の上に君臨しており、20 世紀初頭から今日に至るまでの人類の堕落腐敗をもたらした主原因である。

ダーウィン=ヘッケル主義は主として生物教科書を通じて我々を支配している。ヘッケルの手になる２つの絵（または版画）のみならず、進化の証拠だとして我々の教科書に載せられている他の８つの「イコン」もまた、ジョナサン・ウエルズの『進化のイコン』が指摘するように、偽造、意図的誤導、不正直、あるいは全く証拠にならないかのいずれかである。何も知らない若い学生に事実上強制される教科書が、彼らを騙すのみならず、いかにして科学でごまかしをやるかを教えるように工夫されているというのは、驚愕すべきことである。それよりもっと驚くべきは、こうした事情が一世紀かそれ以上も不問に付されてきたという事実である。

ＩＤの出現が科学者共同体の間に引き起こした恐慌あるいは混乱を考え併せてみると、ダーウィン=ヘッケル主義というものが我々の社会で神格化あるいは聖域化され、唯物論をデザイン論の危険から守るためなら、どんな不正直も正当化されてきた事情がわかる。

ダーウィン=ヘッケル主義が、ヒトラーの哲学の母胎として働いたことは驚くに当たらない。

それはヒトラーを教育して、生命の歴史がいかに展開してきたかを教えただけでなく、良心の呵責なしにどうして殺せるか――進化論的倫理――をも教えたのである。

ヒトラーだけでなくスターリンも毛沢東も、20 世紀の他の共産主義指導者たちもまた、ダーウィンの法則に従って人類を改良しようとしたのである。ダーウィニズムが劣った人種と優れた人種がいることを教えたように、マルキシズムは優れた階級と劣った階級があること、また生存闘争に対して階級闘争があって、これが世界を改良していることを教えた。こうした科学法則の帰依者たちは誰一人として、楽しみに人間を殺したのではない。

リチャード・ワイカートによれば、一般に解釈されているようにヒトラーを狂人とか精神障害者とか考えるのは間違っている。最近のナチズムの研究は、それがダーウィニズムの論理的帰結としていかに首尾一貫したものであったかを明らかにしている。ヒトラーは単に、ダーウィンが『種の起源』で自説の根拠に用いた動物の品種改良を信じて模倣し、これを人種改良に適用し、劣った人種と彼が考えたものを除去し、すぐれた人種と考えたもの――アーリア人種――を優先したにすぎない。ワイカートも警告するように、ダーウィン進化論がナチズムの唯一の温床とは言えないが、それは疑いなく主たる温床であった。

> ダーウィニズムがそれだけでホロコーストを生み出したわけではない。しかしダーウィニズム、特に社会ダーウィニズムとか優生学といったその変種がなければ、ヒトラーも彼のナチ追随者たちも、世界史上最大の残虐行為の一つが実は道徳的に称揚されるべきことであると自分自身にも彼らの協力者にも納得させるだけの、必要な科学的根拠をもつことはできなかったであろう。ダーウィニズム、あるいは少なくともその自然主義的解釈は、道徳を逆立ちさせることに成功したのである[3]。

もし倫理というものが進化するもので、絶対的でも永遠のものでもないとしたら、優れた民族や生存闘争の勝者は、世界を改良するために優生学を人類に対して用いる権利、あるいは義務をさえもつことになる。もし人類が進化の生み出したもので、そのためよりよく適応した者とうまく適応できなかった者がいるのだとしたら、人種差別は正当な科学として認められねばならないだろう。

優生学は今日でこそ嫌悪されているが、19 世紀から 20 世紀へ変わる頃にはヨーロッパやアメリカの知識人の間で、普通に真剣に論じられていたものだった。『アメリカのダーウィン記念日』（2007）の著者ジョン・ウエストによれば、1920 年代にアメリカ全土で 6 万もの遺伝的に劣った人々が、彼らの意志に反して去勢（不妊手術）された。ダーウィニストはこの事実を隠そうとするけれども、ダーウィン自身が優生学の支持者であったことは、『種の起源』の 12 年後、1871 年に出版された『人間の由来』に明らかである――

野蛮人においては肉体や精神に弱点のある者はすぐに取り除かれ、生き残るのは通常、旺盛な健康状態にある者たちである。これに対して我々文明人は、弱者除去の過程に逆らうための万全の努力をする。我々は低能者や不具者や病人のための施設を作り、救貧法を制定し、医療関係者はあらゆる人間の命を最後まで全うさせるように、最大限の技術を用いる。ワクチン接種というものが、以前なら虚弱なために天然痘に抵抗できなかったであろう何千もの人間を、持ちこたえさせているのは確かである。そのようにして文明社会の弱者たちは、彼らの同類を繁殖させているのである。家畜やペットの品種改良を観察したことのある者なら誰でも、こうしたやり方は人間という種族にとって、高度に有害であることに疑いをもたないだろう。飼育動物の場合、世話を怠ったり間違ったりすることが、いかにその動物の崩壊を早めるかは驚くほどである。しかし人間自身を例外として、最悪の動物を繁殖させようと思うような無知な者はどこにもいないだろう[4]。

当然ながら、ドーキンズ教授と同じくダーウィン以上にダーウィニストであったヘッケルも、優生学についてほとんど同じ見解を述べている――

こうした病気をもつ親が医療を受けて、その病身の命をいつまでも引き延ばすほど、その不治の悪を受け継いだ子孫はますます増え、またぞろその子孫には、そうした人為的「医療選択」の恩恵を受けて、永久に消えない遺伝病をもつ親からそれを貰った人間が、ますます増えていくだろう。…我々はどんな状況下でも、生命がまったく無用になっているときにさえ、それを維持したり引き延ばしたりする必要はない。何十万という不治の病をもつ者――狂人、レプラ患者、がん患者など――が人工的に命を引き延ばされているが、それは彼ら自身にとっても社会集団にとっても、まったく何の利益もないのだ[5]。

ヘッケルは無神論的・唯物論的な大義を押し進めるために「一元論連盟」と言われているものを創設した。これは今日ほとんど忘れ去られているかもしれないが、この組織に注ぎ込まれた精神は今も生きていて、あたかも彼が我々の現在の荒涼とした文明の基礎を築いたかのようである。『国家社会主義の科学的起源』（2004）の著者ダニエル・ガスマンは、この連盟の精神を効果的に次のように要約している――

ヘッケルの一元論は「一元論」は、人本主義的・合理主義的な科学の体制化された知的・道徳的伝統からの根本的で過激な決別を提唱するもので、それに代わる異教的・非キリスト教的な思想的伝統に糧を仰ぐものであった。それは人格神の不在、存在の無意味さ、宇宙の本質的な無道徳性、直線的・進歩的な歴史観の拒否、といったこと

を強調する思想伝統であった。一神教の神は死んだ、人類は別々の本質的に二分された生物学的種族に分かれている、超越的な宗教は反科学的な迷信に根ざすものである――こういった彼のおおまかな想定は、ヨーロッパの知識階級あるいは半知識階級の間に、最新の科学によって認められた反論できない真理として、受け入れられていった考え方であった。時間とともにヘッケルの思想はますます先鋭化していき、最終的には国家社会主義（ナチズム）の活動の主たる根拠として利用されるようになった[6]。

これは今日の反ＩＤ的体制派のマニフェストとしても十分通用するであろう。ということはヘッケルが今なお生きていて、現今の科学者共同体の上に君臨しているということであり、ヘッケルの偽造絵が我々の教科書にしつこく使われ続けていることの説明にもなるであろう。

### *ダーウィニストの似非謙虚*

ヘッケルは彼の最も人気のあった著書『宇宙の謎』（1892）で次のように書いている――

> 人間中心的錯覚を起こして「神の似姿」などと思い上がっていた人間性の概念は、胎盤をもつ哺乳類のレベルに失墜する。それはこの広大な宇宙に対して、蟻や、夏の日の蝿や、顕微鏡で見る滴虫や、微小なバチルス以上の価値をもたない。人類とは、ある永遠の物質の進化の一時的な相、物質とエネルギー現象の特殊形態であり、無限の空間と永遠の時間を背景にして考えれば、その卑小さを直ちに思い知らされる存在である[7]。

このような言明――この本の中心思想の言明――もまた、ドーキンズやスティーヴン・ワインバーグといった今日のダーウィニストの言葉として通用するだろう。一見すると、これは謙虚で高ぶらない、傲慢とは正反対の人間観のように見える。しかしそれは欺瞞で、傲慢の裏返しにすぎない。根底ではこれは人間への侮辱であり、宗教的な人々の神の前での謙虚とは全く違ったものである。そしてこれは、ヒトラーやスターリンやその同類たちによって共有される進化論的世界観の、自然な結果である。進化論的思考は、すべての人間を神への悪意ある意趣返しによって、無価値な虫けらの地位に引き落とし、たまたま自然によって選ばれた（自然選択）者たちが、他の者たちを好きなように操作する権利をもつのである。独裁や残酷は人間が虫けらであるがゆえに正当化される。

この態度はまた、ダーウィン的権威の中に居座り、それが今危機にあるために、単にものの見方が違うからといって他の科学者たちを迫害し追放する「傲慢な」科学者たちの共有するものでもある。より深いレベルでは、これは有神論に対する彼らの唯物論的・無神論

的な優越性を保持するためになされる。それは彼らを駆り立てて、変えられないドグマにしがみつかせ、ついには現実を見失わせる。理論とは究極の真理により近づくための仮の道具であり、それが観察的事実やより高度な論理的推論に合わないと分かったときには、棄てられなければならない。しかしダーウィニストたちは彼らの理論に固執することによって、科学と道徳の両方に恥辱をもたらすのである。科学的堕落と道徳的堕落は、我々の唯物論文化のもとでは互いに手を携えているのである。

反ＩＤの宇宙学者レナード・サスキンドは、その著『宇宙の風景――ヒモ理論とインテリジェント・デザインの錯覚』(2006) の中で驚くべきことを言っている――

> インテリジェント・デザインを唱える人たちは、一般に、人間の視覚システムのような複雑なものが純粋にランダムな過程によって進化したなんて信じられないと言う。たしかに信じられない！　しかし生物学者は「自然選択の原理」という非常に強力な武器をもっていて、その説明力はあまりにも大きいから、ほとんどすべての生物学者が証拠の重みは強力にダーウィンを支持していると信じている[8]。

これが恐るべき言明であるのは、「自然選択の原理」を研究者が宇宙を支配するための武器と考えているからである。これは手段を目的とする本末転倒の途方もない考えで、科学と科学者をともに堕落させるあからさまな例である。ダーウィニズムとは権力への意志の一形態である。ダーウィニズムの支配する文明のもとではすべてが狂うのである。

次にあげるのは、なりふりかまわぬダーウィニズム流権力への意志の一例で、これも先にあげたブログからの引用である。このニュースは見出しに、「ＮＣＳＥの神学者がドーキンズの口真似：ＩＤ〈開業者たち〉は〈科学を知らないか、ひどく思い違いをしているか、根本的に不正直〉」とあり、こう書かれている――

> ＮＣＳＥは反ＩＤキャンペーンにおいて、ますます宗教的な反対論に傾いてきており、ある特定の宗教的見解（有神論的進化）をＩＤの科学に対抗させている。そうするのはもちろん彼らの勝手だが、これが滑稽なのは、ＮＣＳＥは常にＩＤを攻撃する根拠として、ＩＤ運動は必要もないのに一つの狭い宗教的見方を進化科学に対抗させていると言っていることだ。今彼らはそれと同じことをＩＤに対してやっている。実際、Hess 博士の反対論はＩＤの基本的な誤解と曲解に基づいている[9]。

ＮＣＳＥ(米国科学教育センター)はダーウィニズムと反ＩＤキャンペーンの牙城であり、彼らは当然、無神論者グループである。だからそもそも彼らがＩＤに反論するのに宗教を利用すること自体が偽善的である。とりわけ、彼らがＩＤを批判して藁人形攻撃だと言っ

ているその同じ攻撃を自分たちがやっていること、特にＩＤを攻撃して「不正直」という言葉を使うのは最も嘆かわしいことで､それは論争の両当事者を深く傷つけるものである。なぜならＩＤ理論の本質は、経験的データを正直に調べることに続く正直な推論ということにあるからである。実際それは「正直であろうではないか。真実を見えなくさせるような不自然な拘束を取り払おうではないか」と呼びかけるキャンペーンなのだ。しかもこうした攻撃はＩＤの故意の曲解に基づいてなされている。それは確実に彼ら自身の不名誉となるものであるにもかかわらず、彼らはなりふりかまわず無神論者の優越性を維持しようとしている。科学と科学はどこへ行ったのか？　ダーウィン体制派はいま、似非謙虚だけでなく似非宗教（キリスト教無神論派！）で我々を騙そうとしている。

### *ダーウィニズムによって腐敗させられた教育*

ダーウィニストは通常、ダーウィンの理論は純粋に生物学的理論であると主張し、それが自然に「社会ダーウィニズム」につながっていったという反対論に対して激怒する。しかしそれは完全に間違った考えである。我々が見てきたような学界体制の嘆かわしいありさまそのものが､「純粋な」ダーウィニズムから自然に社会ダーウィニズムが生まれてきたことの証拠である。社会ダーウィニズムは優生学、人種差別、ナチズムに限定されるものではない。我々が見てきた学界の腐敗は、明らかに優生学=人種差別=ナチズムの一変種である。ただ、今のところ現実の殺人の話は聞かない。

いかに気付かれなかろうとダーウィンに支配された我々の社会では、健全な教育はほとんど不可能である。まずこのような社会では、健全・不健全、正常・異常、現実・非現実のいかなる真の区別も存在しえない。

例えば、我々の（少なくとも日本の）性教育は「進化論的性教育」と言っていいようなもので、人間の性的行動は単に動物の性の延長として、純粋に唯物論的に扱われ教えられていて、それを何らかの霊的（精神的）意味をもつ別のものとして教えるのは、文明に対して罪を犯すこと、法に反することであるかのようである。宗教的含みをもった高いレベルの「愛」という言葉は、教室では決して口にしてはならないタブーとなっている。

同様に、人間の命の尊厳ということを子供に教える場合、教師は唯物論の枠を越えることを許されない。これは生物学で、生命は「無生物的に」、すなわち「化学進化」によって生ずるもので、そこには心とか目的といったものは全く関与しない、と唯物論的に教えられることの論理的帰結である。実を言えば、人間の命の尊厳の進化論的教育などというものはナンセンスで、言葉の矛盾である。しかしそれを公に口にすることは非難弾劾を招くことになり、ほとんど確実に経歴に危険が及ぶであろう。

ダーウィン的教育がいかに社会に浸透しているかを示すもう一つの例をあげよう。何年か前、あるテレビ場組で、明らかに自分でも大して哲学をもっていないある有名な司会者が、数人の若者に「あなたはなぜ自分が生まれてきたと思うか？」と質問した。すると答えは異口同音に「偶然です」というものだった。我々の文化的環境の中ではそれが唯一正しい答えである。それ以外の返答をすることは不法でもあり嘲笑を招くことでもある。

### *文師のＩＣＵＳとＩＤ運動*

1972 年文鮮明師がＩＣＵＳ（科学の統一に関する国際会議）を初めて開いたとき、師の意図しておられたのは、このような嘆かわしい現状から世界を救うことであった。師は現代社会に諸悪を生み出しているのは、無神論に基づくメディアだけでなく学界であることを知っておられたから、彼は全世界から科学者を招集し、彼らがやっている仕事は彼らが考えるように没価値的ではないことに気付かせようとした。その趣旨は、科学は価値の追求であり、科学と宗教の間に裂け目はなく、自然科学と精神（道徳）科学の間にも裂け目はないということであった。それらの間に存在すると考えられている敵対関係は、現代社会に新しく導入されたもので、もともと存在しなかったものである。このことは最も確実に、ダーウィニズムのゆゆしい考え違いの顕著な一つである。

文師は科学者たちに対して、自分の研究を絶対的価値という観点から新しく見直すように示唆した。だから毎回会議のテーマは変わったが「絶対的価値」という言葉は必ずついていた。

この会議の出席者が全体として、果たしてどの程度この提案に反応したか私にはわからない。しかし科学者たちは、文師の先見の明に応ずることができなかったように思える。科学者が自らを変えたがらないのはよく知られた事実である。文師の提案に呼応するようにある変革が起こったのは、最初のＩＣUS 会議より約 20 年後のインテリジェント・デザイン理論ないし運動という形によるものであった。これは残念ながらＩＣＵＳの科学者からでなく、全く無関係ではないが違ったグループ――法学教授フィリップ・Ｅ・ジョンソンを中心とするグループ――から出たものであった。

ＩＤは経験的に確かめることのできる証拠に基づいて、この自然界はデザインされていると主張するが、そこに含まれる意味として、特定はできないがある超自然的なデザイナーを指し示すことになる。ＩＤは、導かれない進化を主張する無神論的議論のダーウィニズムの論駁を中心におくが、その議論は宇宙論的デザインの証拠――物理法則や常数の微調整やその他、人間の生命（生活）と科学的発見を可能にする絶妙に（どう見ても意図的に）

達成された環境的調整、「人間原理」と普通に呼ばれるもの――にも及ぶ。

これは必然的に目的論的世界観を要請することになるが、それは統一思想の主眼点でもある。したがってインテリジェント・デザインと統一思想は相調和し、大まかに言って前者は科学的・機能的な観点から、後者は神学的・演繹的な観点から互いに他を強化し、相補うことになる。今日の科学が、統一思想のようなものを自らの支えとして必要としているのは明らかである。生命起源といった問題――今強く解答を求められている問題――になると、自然主義的科学は無知を告白するよりなすすべがない。

科学内部のもろもろの難問を別にしても、科学が道徳的問題からの分離を主張することは、自らの無能を告白することである。我々は、没価値あるいは無道徳あるいは中立を誇らしげに主張していた科学が、実は中立などでなく、きわめて偏った世界観である唯物論という大義に奉仕するものであることを知るにいたった。このことを我々が理解するようになったのは、ＩＤと統一思想の組み合わせ的理解を通じてである。

『特権的惑星』の著者はこの本を次のように結んでいる――

> 十分な執拗さをもって自然界は我々に、我々が予想しない、あるいは時には予想できないやり方で自らを開示する。ひとたびそれを感じ取ると、この考えは静かに、しかし執拗に付きまとってくる――この宇宙は、それが何であるにせよ、発見のためにデザインされたものである。科学による真理の探究にとって、これ以上の使命があり得るだろうか？　科学的発見は一種の宇宙的威信を享受している。しかしそれは、この宇宙がある目的のために存在しているという可能性を受け入れる人々にとってのみ明らかな威信である（強調原文）[10]。

宇宙の進化を、ある目的をもって導かれたものとして理解したときにのみ、我々は我々自身を、ある目的をもって存在するものとして理解することができる。我々はより高い啓蒙の段階、我々自身と宇宙の霊的かつ科学的理解のより高い状態へと、意図された存在である。言い換えれば、我々はより高い真理と愛を実現すべく意図されている。そこで宇宙の目的論的理解は、倫理と科学を一つの視野のなかに捉えることを可能にするのである。

おそらく信仰的な唯物論者を除いて、誰も世界を見るのに二重の基準を持とうとする者はいないだろう。すべての人が一つの統一された世界観を望むはずであり、それこそ統一思想の狙いとするものである。

不幸なことに、我々の唯物論的文明においては、人々は科学と宗教という間違った対立構

造を信じ込まされている。本当に対立するのは科学と宗教でなく、無神論的科学と有神論的科学であり、ここで科学は倫理・道徳を含んでいる。この間違った世界観を根拠にした間違った考えのもとに、多くの人々は学者世界やメディアとともに、いまだに統一思想について思い違いをしている。そこで我々には、最近よく言われる「唯物論という迷信」から人々を救い出すことが責務としてかかってくる。

ダーウィニズムに支配された目的のない世界では、若者が人生に何の意味を見出すこともできず、自分と世界を高めようと努力する意欲を持てないのは当たり前である。特に、最近よく言われる若者の自然科学への興味の喪失は、この唯物論という迷信の結果として十分に考えられる。科学を絞め殺しているのは唯物論科学者である。

最後に、よく引用される不可知論者の天文学者ロバート・ジャストロウの言葉を引用しておきたい――

> 理性の力を信仰して生きてきた科学者にとって、物語は悪夢のように終わる。彼は無知の山を征服しながら懸命によじ登ってきた。彼が頂上を極めようとして、最後の岩に足をかけたとき彼が目にしたのは、そこに何世紀も前から坐っていた一群の神学者たちであった[11]。